

日本YMCA同盟

THE
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.830 2023

2023年10月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641
URL : <https://www.ymcajapan.org/>
発行人／田口 努 編集人／横山 由利亜



松井リリアンさん（写真=左端）と、保育士・実習生として戻ってきた教え子たち

OPINION

ペルーから移住 “外国にルーツのある子”として生きる

YMCAいずみ保育園 松井 リリアン

私は13歳のとき、両親の仕事の都合でペルーから日本に移住しました。日本の中学校に入学しましたが、日本語が分からず、友だちもできなくて、不安でいっぱいでした。ペルーでは将来、弁護士になりたいと思っていたけれど、日本ではどう暮らすのかも分からなくて、夢も希望ももてなかったです。

学校では先生やボランティアの人たちが日本語を教えてくれて、少しずつ話せるようになりましたが、読み書きはなかなかできなくて、授業中は黒板の字をメモするふりをしていました。部活も大変でした。当時の部活はとても厳しくて、休むと不真面目と言われるし、指導の仕方も怖かった。文化が違い過ぎて、友だち関係も悪くなって、一年後に転校しました。日本語も、日本の社会も本当に難しいと思いました。

やっとのことで高校受験して、外国籍の生徒が多い高校に入学しました。その先生はとても親切で、今も交流が続いています。大学生のボランティアもサポートしてくれました。そこで進路の相談をしたとき、「保育士」という仕事を初めて知ったんです。ペルーには幼稚園はあるけれど保育園はないと言ったら、先生が「じゃ、保育園を見てみよう」と見学に連れて行ってきて、保育ボランティアもさせてもらいました。たまたまそこにいたアルゼンチン出身の保育士が、「あなたなら保育士になれるよ」と言ってくれたんです。それで私は、弁護士とは違うけれども子どもの人権を守る仕事だと思って、保育士になろうと決めました。

保育の専門用語を覚えるのは大変でしたが、実習先の園でフィリピンの子が「先生と私、同じ肌の色だね。私、宇宙人じゃないよね」と喜んでくれたんです。同じ思いをしている子がいる。そう思って頑張りました。資格をとった後もすぐには就職できなかったのですが、YMCAがアルバイトとして採用してくれて、その後この保育園の正職員になりました。それから18年。大勢の人に支えられて、今では後輩の指導をするほどになりました。

今は、私が来日した頃よりも外国にルーツのある子どもたちが増えています。彼らが希望をもって生きていくためには、日本語教育だけでなくサポートが必要です。私の場合、親身になってくれた先生や、夢をもたせてくれた保育士、私を信用してくれたYMCA、一緒に遊んだ仲間たち。そんな出会いに育てられて、自分のルーツに自信をもつことができました。

保護者への支援も大切です。外国人の多くは、日本人の友だちがいません。だから困ったときに、どこに相談していいかも分からないんです。外国籍の家庭が多い当園では、子育てだけでなく、就職や通院、団地の入居申請などあらゆる相談が寄せられます。先日は卒園児の保護者から、「小学校の勉強についていけない」と相談がありました。母語と日本語の2カ国語で子育てすることもまた非常に難しいことです。気持ちをくみとって、ネットワークでサポートすることが必要です。

さらにその土台には、「多文化共生」の考え方が大事です。違いを認め合い、皆と一緒に生きていこうとしなければ、支援も成り立ちません。国が違えば、掃除の仕方、食事の仕方なども違います。「そんな掃除の仕方は汚い」「その食べ方はお行儀が悪い」と頭ごなしに否定してはうまくいきません。「常識」というのが外国人には一番わからない。丁寧なコミュニケーションが必要です。

保育園には障がいのある子もいます。家庭環境もさまざまです。自分にとって当たり前なことも、皆にとっては当たり前ではありません。そこをよく理解して、誰にとっても暮らしやすい、ユニバーサルデザインを目指すことが大切だと思います。「支援する」と考えると負担が大きくなってしまいますから、誰もが生きやすい「多文化共生社会」を目指していければいいと思います。（聞き手：編集部）

*インタビュー全文はこちらでご覧いただけます▶



広島YMCA International Youth Peace Seminar 4カ国から28人参加 ヒロシマの記憶を共有

コロナ禍で活動が制限されてきた私たちにとって、4年ぶりのInternational Youth Peace Seminar (8月4～7日)は初めて経験するプログラムでした。参加したのは韓国・台湾・インド・日本の4カ国28人の学生たち。被爆者証言を聴き、碑巡りや資料館見学を通して、核兵器の恐ろしさを学び、8月6日の平和記念式典に参列しました。学校で現代史を詳しく教えられたというインドの学生、日本の被害を学ぶ機会が少なかったという台湾の学生など、知識・経験の異なるユースたちが、ヒロシマの記憶を共有することができました。そして、炎から逃げた多くの方が亡くなった元安川へ灯籠を流し、共に平和への祈りを捧げました。

見学後のワークショップでは、「未来へ向けて自分がなにをしたいのか」未来への願いを絵、寸劇、ダンス、紙芝居のグループに分かれて表現しました。私のグループは、世界中の子どもが未来に希望を持てる社会になってほしいという“未来への願い”を絵で発表しました。



ダンスグループが選曲した「ハピネス」を会場みんなで歌い、その歌詞の通り笑顔で幸せが広がる光景には感動しました。何よりピースセミナーをきっかけに集まった参加者と友だちになれてとても幸せでした。

このプログラムは6人のボランティアリーダーが中心となってアイデアを出し合い数カ月前から準備したのですが、何度も悩み、助け合いながら自分たちで新しいものを創り上げる経験もまた、私にとってかけがえのない宝物になりました。私は国際ユースリーダーとして、これからも世界中から広島に集う若者たちと平和を分かち合えるよう、このピースセミナーを続けていきたいと思えます。

広島YMCA国際ユースリーダー 服部 唯音

日韓YMCAユースセミナー ソウルで5日間 “大切な友だちのいる国”に

ソウルと名古屋YMCAによる「日韓YMCAユースセミナー」が8月25日～29日、5年ぶりにソウルで開催され、日本から3人が参加。韓国の学生6人と共に5日間の交流を満喫しました。このセミナーは1963年、日韓国交正常化前に韓国YMCAが「過去の問題や偏見にとらわれずに両国の青少年が交流し、新しい友好の絆を築きたい」と日本の青年たちを招待したことから始まったもの。ここ数年はオンライン開催となりましたが、ようやく対面での交流が再開されました。参加した学生の声を聞きました。

セミナーでは、気候変動について語り合ったほか、「日韓クッキングコンテスト」でお互いの自慢料理を作ったり、レクリエーションや観光などを通して交流しました。韓国のメンバーは、Nソウルタワーや野球観戦、明洞などいろいろな所に観光に連れて行ってくれたのですが、どこに行っても「楽しい? 何か困ってない?」と気遣ってくれて、一生懸命にもてなしてくれました。それが何よりも嬉しかったです。

毎晩部屋に集まって、スナック菓子を囲みながら雑談したことも楽しかったです。音楽やSNSなどの話をしているうちに、国や言葉の違いは気にならなくなって、同じ仲間だということを実感しました。

事前研修では、韓国の文化や日韓の歴史なども勉強し、韓国に行くぞと気負っていましたが、参加後は「大切な友だちのいる国」と思うようになりました。

帰り際、韓国のメンバーが、「来年までに日本語を勉強しておくね」と言ってくれました。私たちが韓国のことをもっと知りたいと思っただけで、韓国語も勉強したい。来年の夏、韓国の仲間たちが日本に来ることが、今から楽しみです。



名古屋YMCAユースリーダー 今村 舞雪、春日 恵介、城戸 宏輔

ウクライナから日本へ

軍事侵攻から一年半。長期化する避難生活は、子どもたちにも深刻な影響を及ぼしています。特に10代は、日本の学校や日本語教室に通いながら、夜はウクライナのオンライン授業を受けるという多忙な生活を送っており、過労やストレスから心身に不調をきたす子どもたちもいます。将来への不安や孤独感、戦争への疑問。やるせない思いを募らせる子どもたちにYMCAは、リフレッシュプログラムやプログラミング体験などを提供し、QOL (生活の質) の向上に努めています。

>>>ティーンエイジャーの集い

「日本に来てから同年代の友だちと遊ぶ機会がない」。そんな10代の声にこたえて8月26日、交流の集いが開催されました。会場は日本YMCA同盟(新宿区)。12人の中高生が参加し、ボードゲームなどを楽しみました。「ウクライナから避難するとき、友だちと離れるのがつらかった」という16歳のソロミアさん。日本の学校では友だちができず、本国の友人とオンラインでつながる日々を過ごす中で、この日はウクライナの流行歌と一緒に歌ったり踊ったり、ふざけ合ったり。わずか5時間の集いの後は見違えるような笑顔になり、「久しぶりに大声で話した。また来たい!」と話していました。



>>>東京YMCAサマーキャンプ

ウクライナだけでなく、さまざまな事情から日本で暮らす外国籍の子どもたちを支援しようと8月22～24日、東京YMCA山中湖センターでサマーキャンプが開催されました。参加したのは、ウクライナ避難者10人のほか、モンゴル、ネパール、中国の小中学生計20人。子どもたちは片言の日本語と英語に身振り手振りやイラストなども駆使してコミュニケーションをとり、雄大な富士山を眺めながらボートやカヌー、クラフトなどのアクティビティを楽しみました。言葉の壁から日本の小中学校では孤立しがちな子どもたちは、同じ境遇の友だちと気持ちを分かち合い、「また会いたいね」と再会を約束する姿が見られました。



日本宝くじ協会から助成金

一般財団法人日本宝くじ協会より助成金の交付を受けて、集会用テント32張、宿泊用テント18張を購入いたしました。

このテントは全国18YMCAのキャンプ場や幼稚園・保育園などに贈られ、野外での青少年育成活動のほか、バザーや運動会などの地域行事、災害時の支援活動などに用いられます。感謝してご報告します。



神戸YMCAふれあいうらんど会

ポジティブネット YMCA国際協力募金

引き続き、ご支援ご協力をお願いします。

- ゆうちょ銀行 振替口座(振替貯金)
00190-6-464236 日本YMCA同盟地域国際募金口
- クレジットカード・銀行振込は
下記サイトから
<https://srv.asp-bridge.net/yymca/privacy/7>

